慈光

第十八巻　第七号

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十一年七月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通巻第二〇六号）

目次

善巧摂化……近角常観……(1)
コマねずみ……柳瀬留治……(8)
父母の国……西元宗助……(10)
堂の鈴……佐藤強三郎……(14)
法蔵の四十八願……花田正夫……(19)

善巧攝化

近角常観

一、福間夫人の入信

福間氏の事については既に度々申しましたから、今更繰り返す必要は無いけれども同氏が信仰に入られた道行が如何にも有難いから、今日はもう一度この点をお話致そうと思うのです。

既に皆さんが御存知の如く、御病気は甚だ悪性の癌腫で御一家を始め、御一族の方々が非常に御心配をなされ、歎きの上に歎きを重ねておいでなされたのである。

処が御子息が大層孝心のお方で、親御の御病苦を見るに見かねて、病苦は致し方もないが、どうか精神上の安心を与えたいというお考えから、度々二三の名士を招きて信仰の話を聞かせなされた。

私が昨年始めて参つた時は、御本人、外皆さんの考えて居らるるは

「世の中は実に無常である。生れた者なら必ず死ぬる。栄えた者はきつと衰えて、此世に幸福の続くということはない。今自分等も斯くの如き不幸に出遭つたのであるが、ここは一つ大いに覚悟せねばならぬのである。諦めねばならぬのである。」

とこう云う風に、ただ諦めようとして居られたのであります。

正月の求道誌で発表しました様に、御病人はむしろ非常の衛生家で、従来より衛生の上には特に意を用いて居られたのであつた。然るに前生の報というものか、それだけ注意して居つたのに、今この如き難病にかかつて悲境に沈むというはどういうわけか。併しこれが人生の有様であれば、大いに諦めねばならぬ処であると、こう云う具合で、一面より言えば先ず愚痴を言つて居られたのであります。

私が其時、皆さんに申したには

「成程、人情より言えば、皆さんのお考えは尤もである。一つも無理はない。併しながら、唯諦めねばならぬと力んだ処が、人間はほんとに諦むることは出来ぬのである。自分で自分を諦めようとするのは、恰も、自分で自分の身体を上げようとするが如きもので、到底出来ぬ。

もう此の場に臨んでは、人間は信仰上に気付かせて頂く外は無いのである。然るにかくの如きはかなき人生に在りて、かくの如く罪悪に悩んで居る我々をば、仏は広大の恵みを以て、毎に哀れみ、常に照らして居て下さるのである。この大悲の親様が有難いではないか。この仏の御恵みに気がついた時が信仰である。人間は諦めるのでない、この仏の大悲に安んじて行かせて貰うのである。聖人の和讃にも

弥陀、観音、大勢至　大願の船に乗じてぞ
生死の海にうかみつつ　有情をよぼうて乗せ給う

とあつて、我々は知らぬけれども、弥陀観音大勢至は、慈悲と智慧とをもつて、唯我々を救わんがために、この人生の生死の海に往来して下さるのである。

我々は如何に諦めよう、覚悟をつけようと思つても自分で自分を諦めることは出来ぬ。唯この広大な恵みをよろこび、恵みに安心させて頂くのが信仰の味わいである」

と、この点を力強く申したのである。この時は御病人は丁度第五回目の手術を受けられた後であつたが、この話をきいて、成程と気附かれたそうである。けれどもまだ充分の安心は出来なかつた。

処が其御夫人が矢張り同様に苦しんで居られたので、この時傍に居られた御子息甲松氏が母御に、今のお話が解りましたか、と聞かれた。処がまだ充分解らぬと云うて居られる。其処で私の申すには……茲が要点であります。

――「如何にも御無理がない、一家今迄うち揃うて平和で、又皆さんが非常に勤勉にお働きなされ、正直に行い、真面目にやつておいでなさつたのに、今かくの如き病気が起つたのである。皆さんの色々お思いになるのも、実に無理はないのである。

しかしながら、これは如何に考えても、諦める事は出来ぬ。諦めることは出来ぬが、仏の恵みは今この苦しみの中に頂くのである。

実は人生の上より言えば、誠にお気の毒な事ではあるが、仏の恵みは今この病気を離れて頂くのでは無い、この病気の中に大悲のめぐみが届いていて下さるのである。かく申せば甚だかけ離れた事の様であるが、若しこの御病気がなかつたら斯くの如く御一家打ち揃つて道を求めなさる事も無かつたであろう。又かくの如く真面目に信仰をお求めなさる時節も来なかつたであろう。然るに今斯くの如く皆さんが熱心に法をお聴きなさるようになつた事、すでに病気が御縁で、仏の大悲が届いていて下さるのである。故に病気に苦しむことは、人生的には如何にも不幸の極であるが、而も、この不幸の中から仏の大悲は、健康にたよるな、

財産にたよるな、幸福にたよるな、乃至小供の孝心にたよるな、唯頼りにすべきは仏の大悲一つであるぞと、教えて下さるのである」

とお話致したのである。処が御夫人は此話を聞かれて、えらく感動せられたと見え、形をかえて喜んで居られた。

丁度この時私は高等師範学校に参るべき時刻になつて居つたので、そのままその方へ参つてしまつた。翌日甲松君が来られて「母が昨日から大変喜んで……」というお話である。

そこで私はその後再び伺つて見ました処が、御夫人は彼の時、初めて人生に仏陀善巧の御方便が解つたと言つて非常に喜んで居られる。ここのところを皆さんによく聴いて頂きたいと思います。御夫人が言われるには

「自分には十年前に亡くなつた一人の母(姑)があつて、其母が非常な篤信者で、常に人生は信仰でなくてはいかぬから、信ぜよ〳〵と、いう事を始終言つて聞かされた。けれども自分は今迄さほどにも思つて居なかつたのである。処が先日のお話を承つて、成程今こそ信心を頂くべき時であると、気がついた刹那に、突然、十年前別れた母の事が思い出されて、あゝこれだ、これを知らすが母の心であつたかと思うなり……甚だ著しい話であるが……ありありと眼前に母の姿が顕れて、それから四五日というものは常にその母が自分の至る処についていて下さるような感じがして、もうお慈悲を疑おうとしても疑えない。今迄泣き悲しんでいた病気も、全く仏のお恵みであつた。本願の御催しであつた事が解つた」

と言つて、非常に喜んで居られたのである。仏の善巧摂化ということは、この話で明らかに頂けるのである。

この御夫人が、初めに、苦しいけれども斯く諦めねばならぬ、こう思わねばならぬと言つて居られた間は、本当の信仰にはなつていなかつたのである。ここは甚だ大事の処であります。

我々が信仰を求むる上に於いても、ここをこう思うのが信仰であるなどと思つたら、すでに計らいにおちているのである。信仰は計らいや、思いなしではない。設え口では同じようであつても、真個の信仰にはなつていないのである。

「今現にこの病気、これ実に信心を知らしめて下さる仏の御手廻わしであつた。母が存命中に云われたもここであつたか」

と、気がついた所で、初めて其刹那に人生の光景が一変した。今迄の人生の夢が醒めて、真実の仏陀の御力、仏陀の恵みが顕れて下さつたのである。ここで真の信仰の光の中に入ることが出来たのであります。

さて我々もみんな日夜にこの如来の御方便を受けている

のである。何れにしても有難いと気がついた時が信仰の人となつた時である。有難いとわかつた事が、即ち信仰なのであります。

自分で信仰を求めようとして得られるものではない。又自分で信仰の内と外とを区別する事もいらぬ。とに角今迄は広大の恵みがありながら、自分で御恵みを隔てて居つたのである。処が一点そのお恵みが有り難いと気付くなり、人生皆この御恵みであると解るのである。

さて福間氏の御夫人はそれから非常に喜ばれて

「今まで人を不足に思つたは人を相手にして居たからである。仏の恵みを思わせて頂けば不足も何も無くなつてしまう。人情では辛くも、悲しくも思う時でも、大悲の前には消えてしまう」

と云つて喜んでお出でになる。

二、福間氏父子の入信

以上は御夫人の喜ばれた道行きである。次に福間氏自身に就いては、既に「獲信之記」で氏自身が述べて居られるので今更言うまでもないのである。が大略述べよう。

御本人は始めは随分聞かれても、真実には未だ解らなかつたのであります。処が六回目の手術を受けられた後で、病苦が激しくなつて、起つても居つても堪えられない。

この福間という方は、信仰後は無論のことであるが、従来より極めて真面目な方で、実に立派な紳士である。決して無理など言う人ではなかつたのです。けれども人間は、如何に立派な正しき者でも、仏の恵みには入らぬ迄は、矢張り自分で努めてやつているのである。即ち自力で修養しているのである。普通に人生の修養と言つているのは、人間の立場で、自分の気儘を抑えて、努めて強いて善をする事である。之を普通に、修養である、道徳であると言つているのです。けれども或程度以上は人間の力では堪え切ることは出来ぬ。普通に道徳や修養ということは、或る意味では人間が苦痛を忍びてなす所に価値があるといつてもよい位になるのであります。

福間氏は、今迄は能く堪えて来られたのであるが、この第六回目の手術をうけられた時には、もう堪えきる事が出来ぬ、病苦に攻められて、心が急になり、前後を顧みる余裕もなくなつた。

其処で御子息や御夫人は全力を尽して種々に介抱せらるるけれども、何とも仕方がない。……私はここは信仰の話として、遠慮なく申すのです。……其処で御子息は、

「自分も今迄色々と力を尽して見たが、もう此上は仕方がない。もう親孝行は止めである。又今迄は珠数を繰つて来たが、信心ももう止めじや」

と言つて珠数を切つてしまわれる。

病人も、弥々急になつて、とても我慢が出来ぬ。出て行つて了うと言つて、病人がとうとう病床を起たれる。……とような騒ぎになつた。

福間氏は、その病苦の極に達して病床に仰臥しつゝ、フと

「余は仏陀が吾人を助け給うと云うことを聞きしものにあらずや」

と気附かれたのである。茲で気が附かれたというは、実に偉大なる事であると思います。自分の子も妻も、乃至自分の身体までが当にならぬ最後に至つて、仏の大悲に気附かれたのである。

又家族の人達より言つても、今まで根限りつくし、根限り親孝行をして見ても、その場で親の病気にかわる事も出来ず、何とも仕方がなくなつた。もう一つ言えば親孝行のための念珠は切らねばならぬようになつたのである。甲松君はここに到つて、フと

「親鸞は父母孝養のためとて一遍にても念仏申したること

といまだそうらわず云々」

と云う一句が思い浮かび、念仏が内から湧いて出るようになつた。即ち親孝行のための念仏ならば、最後に行けば消えてしまうのである。この弥々の最後に達した時に、始めて仏の恵みは届いて下さつたのである。これは信仰上の最要点であります。

此間もふと気が附いたのであるが、観無量寿経で阿闍世王が、父の頻婆娑羅王を牢に押しこめ、又母の韋提希夫人を苦しめた時、釈尊が韋提希の請によつて、王宮に降臨して説法をなされた。其時釈尊は一言もお前は気の毒だとか不幸だとかいう人生的の同情の言葉は仰せられて無いのである。ここである。人間は如何に己を制した処が、人間相手にやつて居る間は、最後に倒れるより外に道が無い。如何に親が子供のために考え、子が親のために憂えた処が、最後には行き詰り、止めるより外に仕方がなくなるのである。親孝行のための念珠は切らねばならぬようになるのである。けれどもこの極に達した刹那に、一念『仏の恵みは斯くの如き者を助けて下さるお慈悲であつたか』と気が附いて見れば、もう嬉しくてたまらない。かくて福間氏も甲松君も、第六回目の大手術の後で仏の恵みに気が付いて、その嬉しさに溢れて書かれたのが『獲信之記』であります。

昨日も見舞いまして御病人から承わつた話をお伝え申します。昨日は第八回目の手術で、実は結果の程もはかられぬ程に迫つていたのであります。けれども御病人はノートへ鉛筆で書いて、非常に喜んで色々筆談せられました。

一字一涙ぐらいの話でなく、字々全く血であると言わね

ばならぬのである。そうして文字に書いて云わるるには

「自分は今まで殆んど何とも言えぬ苦痛を嘗めて来た。がこの苦痛の中で、この広大の御恵みを受けた事は実に何とも言えぬ程有り難い、実は今日長老を招いた次第は……御病人は我々を長老と言つて居られるのです……自分はこの病苦の中で斯く喜んで居る事を書き度いが、もう書く事が出来ぬ。自分は仏の御恩が身に余つて嬉しい、何時お浄土へ引き取られても更に心に思い残す処がなく、只広大のお恵みを喜ぶばかりである。

だが広大なる仏のお引き取りで彼土へ参らせて貰うまで、此世にある限りは此身は自分の身で自分の身ではない。皆仏の物である。仏の広大なる御恵み中のものである。それ故自分は此身体を飽くまで大事にして、一寸も疎かにせぬ考えで居る。どうかこの喜びを聞いて欲しい。どうかここを察して呉れ」

といわれる。それが今言う如く皆血を以て書いた文字なのであります。で私の申したには

「能くわかりました。今日私を呼んだ訳は一は貴方の喜びを聞かせ度いためであろう。又一つは私に聞かせて沢山の人に喜びを頒かちたいためであろう。貴方の心に別に求むる所があつてではないが、唯この喜びを告げたいためであろう。苦しい病気の中から、一々聞かずとも、苦しみの中から筆をとつて御話になるので皆わかる、必ずこのことをみんなに話しませう」

と申したところ非常に喜ばれた。なお自分の喜んだ初めをみんなに話したいと言われる。其処で又私は

「実に有り難い貴方のお心である。仏教では常行大悲と言つて、一旦信仰に入つた者は、恵みが溢れて人に話すというのであるが、貴方のお心が正に常行大悲である。貴方のお心は即ち仏意の存する処であるから、私が屹度沢山の人に話しましょう」

と申した事であつた。

そのうちに弥々手術にかゝるようになつたが、どういう訳か腹の物がまだ充分に下つて居ない。そこで医師は又下剤を用いたり、浣腸したりして、色々下そうとするけれども、思うように行かぬ。そのため本人も甚だ気が進まぬようである。何か考えて居られるようであつたが、中頃になつて突然

「みんな仏じゃ〳〵」

と言われた。之は一族をはじめ、ここに居る医師も看護婦も皆仏であると喜ばれたので、私は非常に驚いた。私はむしろ御病人に人生的に同情心を起こして、煩悩を起こしつつ眺めて居つたのに、本人は是程に喜んで居られる。私は実に驚いたのであります。そこで私は、

「何事も仏陀のお恵の中に、医師の言の如くなされたらよろしかろう」

と言つて、法然上人が親鸞聖人の三十三才の時にお授けなされた善導大師の文

『若し我仏と成らんに、十方の衆生、我が名号を称えて下十声に至らん。若し生れずば正覚を取らじ。彼の仏は今現在成仏したまう。当に知るべし本誓重願むなしからず、衆生称念すれば、必ず往生を得るなり』

を出して、此通り仏の恵みは毫も間違いのない処であると申した。又、熊谷蓮生坊へ法然上人よりおつかわしなされた書面の

『義なきを義とす。様なきを様とす。浅きは深きなり。唯南無阿弥陀仏と申せば、十悪も五逆も三宝滅尽の時の者も、一期に一度も善心なき者も、東西わきまえぬものも、決定して往生を遂げ候なり。釈迦弥陀を証とす。』

というお言葉を読んで、決定往生疑いなき事をお話したのであります。すると病人はニコ〳〵と笑つて居られる。傍に居られる一家の方も皆この様子を見て笑つて居られる。どうしても病床とは思えぬ程であつたのである。私は更に進んで

弥陀観音大勢至　大願の船に乗じてぞ

生死の海に浮かみつゝ　有情を呼うて乗せたまう。

大願海のうちには、　智愚の波こそなかりけれ

弘誓の船に乗りぬれば　大悲の風にまかせたり。

五濁悪世のわれらこそ　金剛の信心ばかりにて

ながく生死をすてはてて　自然の浄土に到るなれ。

金剛堅固の信心の　さだまるときをまちえてぞ

弥陀の心光摂護して　ながく生死をへだてける。

此等の和讃についてもお話致したのであります。段々斯くの如くお話して居るうちに益々有難い話が出て

「昨日一月の十八日は御生母の祥月であつた。先程も獲信の日も十八日であつた。十八という日はきつと何かがある。今日も実に有難い事であつた。」

と喜んで居られた。

そして度々病人が言われるには

「自分が死んだら医学のために解剖をして貰つて可い。又臨床講義に行く必要があつたら、何処へでも行く」

と申され、又それとおなじく

「若し自分の様子を見て信仰の為になるならば何処へでも行くから」

と申して居られるのである。……

（明治四十一年一月十九日講話）

コマねずみ

柳瀬留治

私に宗教の目を開かせた友が三人いた。既に皆死んだ。その一人、原田君という建築家が感に入って言った。

「われ〳〵人間は籠の中で糸車を廻わしているコマ鼠みたようなものだ。いつも現在、輪の頂点に立ち、前へ前へと車を踏み、立場が絶えず前進していると思っている。現在を立場の頂点と思い、懸命に前進させていると思っている。ところが位置はチッとも変らない。ただ時が流れている丈である」

という意味だった。私も成る程そうだと思った。かえりみると、順境にあれ、逆境にあれ、おのれのベストを尽して前向きに踏んでいる。よかれ悪しかれ力のかぎり踏んでいる。これがおのれのギリギリの頂点だと思うのである。

これは生活経営上、前進さす意図で踏んでいるのであるが、これを移せば、我々の自我中心、自我の人生の項点に常に立って凡てを見ているそれでもあると思う。

私共は何千何万の集りの中にある時も、自我意識が中心となっている。「何だ随分いろんな人が多勢来ているなあー」と自己を中心とし、己れのレンズから他を眺めている。

又会議場などで、何か問題に対して意見を徴される折、人が意見を述べると、何だあんなことなら誰だって思っている。偉そうに勿体つけて、なぞ思う。自我中心に他を見るのである。議事などは客観的に万人に妥当せねばならぬのであるが、人間は自我中心なためなか〳〵そうは行かない。多くは自我のレンズを通して妥当だと思う意見だらう。

若しすべての人の見る角度を取り入れるとしたら中心の置き所がなくぼやけたものにならう。資本家、労務者、為政者、庶民、善人、悪人、人道家、犯罪者等々、皆の言い分を認めたらどうなるであらう。中心どころでなく、いずれが是か、いずれが非か決し難くなる。

私など学校で哲学をやっている頃、学は客観的妥当性がなくては真理的でないということから、同級生の中に、個性をなくしてと考えて変になっていたのがあった。自我を

排除すると第二、第三の自我が抬頭してくる。仏教でも天台宗などで、我を否定するのに、想に非ず、非想にあらざるに非ず、といったことを云う。

自我主観はラッキョーの皮同様で、剝ぐと芯まで皮なのが人間であって、これが芯だという奴もやがて皮をつくるそれが我々なのである。

自我というものは根強いもので、とても自分自身の力で滅却出来ないものとしれる。〈自我を尊重すべきだとの現代の教育は、そした人間を是認し、それで行くほかはないとしてのことで、それはそれとして〉

自我は人間の始末におえぬもの、これが人間の争闘や悩みや、迷いや、罪悪の根幹をなす。で、我を無明の根元とし、この自我から脱れる道、救済、悟りを説くのが仏教なのである。

自我のラッキョーそうしたもの全体、その物が光を被って救われ、ラッキョー性を気にせず、又誇ることもなく、光をのみ尊しとする。即ち無我といい大我という境に転じる。これ以外に生きる道がないというのです。

（短歌草原誌より）

錦鯉

留治

父が生をかけし錦鯉子の我も老いていよいよ愛でて止まざる

飼ひめづる三色更紗の錦鯉死して浮けるに胸の崩れつ

好物のもろこし殻に追ひ縋りゐにける鯉の浮けりたゆげに

危ふしとポンプ送気はなしけるが既に手後れ鯉遂に死す

飼ひめずる鯉は好物に命捨つ、好みにわれの溺れて悩む

己が目を娯ますのみに生き物を飼ひては死なす咎われにあり

枕辺の盥に魚を遊ばしめ曙覧病めりときく羨しさよ

藻伏束鮒の歌のよろしさよ水ぬきて捕ふる鯉の手に余る跳ね

水ぬきし池ほの甘く藻の香たち胸ときめかす藻にひそむ鯉

父母の国

西元宗助

一

本日の講題を「父母の国」といたしました気持は、ことし母の七回忌、父の三十七回忌にあたることと、いま一つ仏をも法をも知らなかつた私が道を求めてまいります過程に、まつたく先祖や親たちのおかげがあるからであります。

あるとき、お前はお浄土があると思うかとある仏教学者から問われたことがあります。私は思わず親たちが念仏申して旅立つていつたところ、その国に私もかえらせていただきます、と答えましたことです。また念仏申す身になつた動機も、私の先祖、肉身たちが念仏申してお浄土にかえつていつた。それで私も親のまねをしようかといつたことから「父母の国」と題しました次第です。

しかしこれからお話しいたしますことは、こんな晴れがましいところで申し上げるべきものでありません。だいたい念仏と申しますものは、人様の前で大ぴらに申しあげるものではないように私には思われます。家にかえつて、誰もいない片隅で「ナムアミダブツ」と申すのが私にはぴったりいたします。これから申しますことは、人さまにはいえない恥ずかしいことです。これからひとりごとで、両親に感謝をこめて申し訳けなかつたことを語らせていただこうと思うのであります。

私は「仏とも法とも知らなかつた」ものであります。私がお念仏にふれた一つの因縁は郷里の鹿児島の旧制高校の卒業間ぎわ、父が喉頭結核でたおれており、しかも弟や妹をかかえて家は借金だらけで、とても大学にいけそうもなかつた。周囲の人々もお前は大学へいきたいだろうけれど金取りになるしか道はないといいますし、それで私もなかばあきらめました。しかしあきらめるということはあきらめられんということです。しようことなしにそうなつていたときに、母方の伯父がある日、私を呼んで「お前、高校を卒業して大学はどこにする」といいます。

私は、病気の父をかかえ、借金だらけですし、そんなこ

とより、どこかの会社に勤めを探しますと申しますと、お前、大学にいきたくないのかといわれます。本当はいきたいのです。そんならいけばいいじゃないか。だつて生活費から何から何まで出してもらつて、そんなおこがましいことはできません。そのうえ大借金をかかえて、私は一生かかつても払いきれませんと申しますと、伯父は「ナンマンダブツ」とお念仏申されながら、お前の気持は殊勝だが、大学に行つてみないかといわれますので、それではあまりに申し訳けない、有難すぎると申しますと、そんなに申し訳けないと思うのなら頼みたいことがある。いま、わしの家は恵まれて金もある、これは世の中の因縁ごとや。商売しているから金は欲しいが、しかし仏法を聞かせていただいたおかげで、お金を出させていただきたいのじや。よいか。それでも気がすまんと思うのであれば、お前に頼みたいことがある。それは、この間お前の家の仏壇を開いたらホコリだらけだつた。花も枯れとつた。もしお前が本当に済まない、ご恩返しできんと思うのなら一文もかえさんでいい、そのかわりときどきでよいから仏壇をふいてどんな花でもよい代えてくれんか、といいます。道ばたの名もない草花でもよいから供えて、一口でもよいナムアミダブツとお礼申してくれ、それで十分だ、と云われます。

私はこの言葉に本当に驚きました。いまでも覚えていますがからだ全体がびりびりとふるえました。それから、わしは金を出すことを誰にもいわん、お前も誰にもいうな。そのかわり、仏さまにお礼申してくれといいます。私はこれを聞いて、伯父さんこれが仏法ですかと尋ねますと、にこやかな顔をなさりながらナマンダとうなずきます。この感動がまさにこの道を求めねばならぬと決意させたのであります。しかし、それで道を求めれば、めでたしめでたしですが、ともかく京大哲学科に入学が決つた。

二

一方、私の父は絶望視された喉頭結核で入院しております。ある日主治医によばれて病院に行き、父の命があと一二ヵ月である、と宣告をうけました。が、私の気持はすでに京都にとんでいました。のびのびとしたいと、そればかり思つていた。父の方はやせおとろえてあと僅かな寿命。わたしの父に対する気持は、どうせ助からんのなら、病気は苦しいだろうし、早く死んでくれたほうが楽だろうし私たちも助かると思つた。父が死んでくれなければ安心して京都にも行けないし、いつ死んでくれるだろうか、というような恐ろしい気持がふつふつとでてきました。

ある日のことです。重い足どりで病室に入りますと、父が毛布を頭からかぶつている。コト切れたんではないかと急いで毛布を払ってみると、目をまつ赤にした父が「宗助

かんにんしてくれ」と泣くのです。いまの金で一日の入院費が三千円です。菌はまき散らすし、借金はふえるばかりでそれが苦になつて、昨夜は首をくくつて死のうと思つた。だが俺はそれで楽になるが、のこつた家の者のことを思うと一生うかばれんだろう、といつてこれ以上は生きられんし、宗助かんべんしてくれといいます。私はいつ死んでくれるかと思つて尋ねた病室のことです。死ぬることも、生きることもできんという父を前にして、本当に私の罪業の恐ろしさに驚くばかりでした。人さまにいえたことではありません。こんな恐ろしい人間をいつたい誰が救って下さるのか。阿闍世太子が父を殺し、母を幽閉したこと以上の私。これを一体誰が救つて下さるのか。京都にいつてからの私の問題になりました。

いろいろなご縁をいただいて、すこしずつ本願の宗教を知る身にお導きいただき、京都生活をはじめましたが、しかし自分では道を求めているつもりでありながら、とことんまで迷つていました。蓮如上人仰せの「心得たというは心得ぬなり」ということもわかつたつもりでいました父の最後の言葉は「お母さんを大切にしてくれ」ということでした。やがて三年経つて京大を卒業した。しかし、親のおかげなどとちつとも思つてはおりません。むしろ有頂天になつて大学を卒業し、ひとかどのご信心をいただいたつもりで、坊さんは本物でないとか、本願寺教団はダメだとか云つて、わしが、俺がの信心をふりまわしておりました。そして寺まいりはするけどお賽銭は一文も差し出さず、無銭飲食の仏法喰らいをし、ただ口先きだけでは、如来大悲の恩徳は身を粉にしても報ずべし——とまことにお恥ずかしいことだらけの身であります。

三

そのうえ、肺疾になつて就職も出来ず郷里にかえりました。悶々と過ごしていた矢先、親しい友人から「〇月〇日大学総長媒酌のもと〇〇家〇〇嬢と華燭の典を挙げることになつた。万障くりあわせのうえご出席を……」という一通の書状が届きました。これをみた途端、祝福すべきはずの私であるのに、喜ぶどころか、悲しかつた。「ナマンダ」と口では念仏を称えるのに、心はますます暗闇になつてどうしようもない。その挙句は、なんで私は病気になつたんだろう。どうして母はあんな肺病やみの父と結婚したんだろう。お母さんさえもつと賢かつたらこんなことにはなつていなかつたはず。勉強しろ勉強しろといつて躾のことはちつともかばつてくれなかつたと、母をさえのろい、自分はちつとも悪くない、みんな周囲が悪いとあたり散らすありさまでした。歎異抄や教行信証をかたつぱしに読んだり寺参りもしたけれど、荒れすさぶ気持の解決にはなりませんでした。ただただ自分という人間の恐ろしさを知るのみでした。全くメチヤクチヤです。そんな日が続いておりま

すと私も母も寝れません。ある晩のことです、うなされている母に気づいて問いつめると「私がいたらぬためお前を邪気にした。みんな私が悪いのです、かんにんしてくれ」と泣くのです。謝まらねばならんのは私のほうです。本当に驚きました。私の心は鬼です。凡夫とは悪人とは私のことでありました。浅ましいとか、罪深いとかいつている間はまだ楽です。浅ましいということすら云えない、まつたく救われようのない私だつたのです。

わたくしのほうから謝まらんならんはずの母から「本当にすまん、かんにんしてくれるか」といいます。謝まらんならんのは私です、私こそ鬼でした。私が悪かつたんですと、はじめて宿業に漸く気がつかしめられました。本願の光りに照らされて私自身をはじめて知らされたのです。しかしいくら謝つてみても一ヵ月と懺悔の心はつづきません。私という人間はどこどこまでも浅ましい限りです。ご信心いただいたというてみても、私のすることはみんなざれごとです。「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界はよろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」ウソから出たまことです。私の口からでる念仏は吐息だつたり、やけくそだつたりでしたが、その念仏から、本当の念仏を有難いといただいたのです。いろんなことがありました、おかげでこのようなものをこそ助けんと思召したちける本願の忝けなさよであります。いま現にどこどこまでも助かりようのない私その私を、どこどこまでも助けたまわずばおかんという念仏一つに生かされています。

いまから四年前、父母の年忌で郷里に帰つて親族と一緒にお墓参りしたときのことです。墓前に合掌しておりますと、子供たちが、お祖父さんやお祖母さんはこんな離れた土地の下でねむつていて淋しいだろうなあ——、といいます。私は「なるほどお二人の遺骨はここにあるが、お祖父さんお祖母さんはなあ—。仏さまになつていられる……」といつてハッと気づきました。父こそ、母こそ仮の世の父母となつて私に念仏をとどけて下さつたのだと。「人身受けがたし今すでに受く、仏法聞きがたし今すでに聞く」の仰せの如く父母こそ菩薩であられました。こう感じたときなんという永い間、私はどこどこまでも心得ちがいをしていたことかと、ほんとうに驚いたことでした。法蔵菩薩の永劫のご苦労、その一端こそ私の父母の生涯のうえにもあらわれています。本当に親不孝とも知らないで過ごした生涯をふり返つて、父母の年忌をしみじみと味わわせていただく次第です。お恥ずかしい私ごとをおききいただいてまことに恐縮でありました。それにつけてもいよいよ本願の御真実を仰ぎまいらせ、仏徳を讃嘆いたすばかりでございます。

〈広島市の花祭記念講演要旨、文責在記者〉

堂の鈴（遺稿）

佐藤強三郎

慰問（二）

信哉は月に二度位は欠かさずに刑務所内のお小夜を訪ねた。こんなことが二年位も続いた。然し、一旦固くなった感情はます〳〵ひがんで行くばかりであった。

お小夜が希望すれば信哉は気軽に会って慰問した。そうこうして二年位も過ぎたある日、信哉に、

小夜「何か宗教の本を入れて下さいませんか」と突然、意外にも、久し振りに語り出した。

信哉「何か注文がありますか？」

小夜「ありません、貴方におまかせ致します」

数日後に、数冊とどけた。

……

その後、信哉が訪ねた時に、

小夜「先日は御本をありがとうございました。読んだ中に〃恨みに報いるに恨みをもってしては永遠に平和は来ない〃という一筋がありました。私も、そう思います。ところが、その恨む心をどうして止めるか、止めようとしても、ムク〳〵と入道雲の様に巻きおこって来る。時にはピカ〳〵と大雷雨となり、思わぬ災害を与える。恨みを忘れるなんて、ドウして出来るんでしょう。不幸続きの私にはそれが出来る見込みがありません。困ったものです」

信哉「そうでしょう。無理もありません、忘れられんでしょうね。平和になるには恨みを忘れさえすれば良いと私も思いますが……」

小夜「その恨みを忘れることが出来ないのです。そうすれば私はヤッパリ悪いのです。悪人は人に呆れられ、憎まれ、捨てられます、肩身が狭いことです」

信哉「悪い者は人が呆れます。此世では仕方がありません。そうとわかってもやめることが出来ないので、困りますね……」

小夜「悪い心では、自分も苦しみ、人にも憎まれるから、

やめよう〳〵としますけれど、それが愛欲のため遂に逆上して、あんな向う見ずのことをやってしまいました。……もう一年もして出所すればもう決してあんなことはやるまいと今は思っています。それでも意志の弱い私のことですから、どうなるか、自信がありません。

ここに居れば四六時中、監視されていますから自由がありません、それで悪い事をやる隙がありません。自由の社会へ帰れば、又どんなことをやるかわかりません、心配です。自分を押える力が無いのですから本当に不安でたまりません、ゾッとします。何しろ私は前科者ですから」

と小夜は淋しく笑って、下を向いた。

信哉「どうしても自信が無いと云われるのですか？」

小夜「止める積りです。その決心ですけれども、私の決心なんかチッともあてになりません。多分駄目だと恐れています。いや、決して止みますまい、何しろ一度やったのですから……。

もう私なんか、誰も相手にしてくれません。生きている値打のない人間ですから」と又下を向いた。

お小夜は考えた〳〵どんなことがあっても、この世では悪い者は呆れられ、捨てられるにきまっている。切角信哉さんに会えても駄目にきまっている。ああ、呆れられるより他ない私だ。これも身から出た錆、自業自得だ。どうせ行く先は地獄だろう、いやそれにきまっている。しかし、地獄なんてあるものか、極楽など作り話にきまっている。今迄誰も見て来た者は無かろう〳〵と、うなだれて考えた。

……

信哉もうつむいて、ため息をついていた。恥かしそうに手を膝に組んで、しずみこんで悲しそうにしている。

お小夜は、チラッとその様子を見て不思議そうにして顔をあげて信哉を見た。信哉は無言、……。

小夜「どうかなさいましたか？」

信哉「私も前科者です。精神上の前科者です」

小夜「エ〳〵？」と言ったきり、口を結び眼をまるくして見つめている。信哉はまるで子供が先生にでも叱られている時のように、下を向いて沈んでいる。

小夜「何と、おっしゃいましたか」

となおも信哉から眼を離さない。信哉は依然として、しょんぼりとして、下を向いてだまっている。

小夜「どうなさいましたか」と重ねてきいた。

しばらく、沈黙が続いたあと、ようやく信哉は

「私は精神上の前科者です。私は前科者と変りない人間です。人を呪い、人を憎み、人を殺そうと思ったことがありました。相手をやっつけなくては、死んでも死に切

れない、と毎日もだえました。毎日考えてばかりいたものですから頭もボンヤリして、何も判断がつかぬようになってしまいました。……自分は悪い、それなのに悪いことがやまぬ。

悪人は呆れられる。生きる価値の無い者は、無用の長物ではやく世の中から消えた方がよいだろう。自分は煩悶を続けて、その極には、人を殺すこともそんなに恐ろしい事ではないように思われた。そういう日が長く続きました。

あのまゝで暮して居たら、私はどうなったか。キット私も大それたことをしたかもしれぬ、今思い出してもゾッとする。

貴女と心の中は同じです。ただ形にあらわさなかっただけです。その時自暴自棄になり、自制心の薄れた私は、何時、ドンナことをやり出したかも知れませんでした」

……

お小夜は、目たたきもしないで、じっと聞いていた。

……

信哉「そん時、私は教を聞いたのです。

＝悪人をどこ〳〵までも呆れない。悪い心を止めることが出来ないことをあわれんで、どこまでも呆れぬという心を聞いたのです。極重悪人を可愛想に思い無限の大悲をもってどこまでも呆れないというお心をきいたのです＝

人を恨み、人を殺しても又自殺しても自分の苦しみは直らぬ、只苦しむ心のみが残る、心の解決が無いから。

恨みに報いるに恨みをもってしては、永久に平和は来ない。先ず何よりも自分の心を解決しなければならぬ。世の中の相手は無数にある、それを一一恨んでいたのではいつまで経ってもはてしがない。そして遂には自分の方が疲れて困って倒れてしまう。よく考えねばならぬ。

貴女はお藤さんを恨んだが、それで自分が幸福になりましたか。又貴女はかって離婚した経験があるとか……その時は主人を恨んだでしょう。恨んだ結果はどうでしたか。主人との縁がもどりましたか？貴女の心が晴れましたか？」

とお小夜をまともに見た。……

お小夜はうつむいた、そして心に思った。

〈私は前の主人が悪いと嫌って別れ、それから恨んできた。その後別のよい人を探して居るが、未だによい人は見出せぬ。……お藤さんを恨んで来たが、一郎さんとの仲はチッともよくならぬ、それどころかだん〳〵皆から離れて行くばかりだ。人を恨んでも自分はすこしもよくならぬ。自分が疲れて苦しむばかり、無駄なこと、悪い

ことである〉
小夜「恨んでも、罪を重ねるばかりでした」
信哉「恨むことがそれではやめられましようか」
小夜「やみません、この恨みをどうすることも出来ません
たれもこんな私を呆れて寄りつきますまい」
信哉「その悪い者を、その通りに知った上に、止めようと思っても、止め得ないことをあわれまれて、どこまでもお呆れのないお真実心をききましよう。無碍のお慈悲こそは、いかなる罪深い、悪い者をも決して呆れ給わぬのです。
全体、悪い者は人から呆れられるから、悪をかくします隠すから人をへだてます。隔てるから一人ポッチになって淋しいのです。淋しく苦しいのはいやだから、隔て心をやめようとしますが、止みません。遂にはそのことに絶望してしまいます……。
その時に、もし他から、貴女の隔て心の止まぬのを知って、それは止めようとしても止まぬであろう、と言うて下さったらどうしますか。氷は自分でとけようとしても、とけられないのです。然し、どんな沢山のひどい氷でも、太陽の前には何等の障りとならぬように、こちらの悪をもって、先様の真実を負かすことが出来なかったら、どうしますか。
〃仏かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きのわれらがためなりけりと知られていよ〳〵たのもしくおぼゆるなり〃とありますように、かねてしろしめして、隔て心のやまぬ凡夫と仰せられてあるのです。私共が言わなくても、前もって知っていて下さるのです。
七百年もまえに親鸞聖人は
〃さらばそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ〃
と、御述懐していられます。かねてとは、私共の方から申上げなくとも、いや私共がそれをそれと気付くよりもっと前から、もう御承知下さっているのです。これは同じ苦しみをされた人でなくては出来ないことです。
又、正信偈には
極重悪人、ただ仏を称すべし、
我れもまた彼の攝取の中にあり
と仰せられてあります。極重の悪人は、それを何処までも隔てず、呆れ給わぬ弥陀の本願を仰いで、念仏なさい我れ（源信僧都）もまた弥陀仏に攝取せられて慈悲のふところの中に生かせて頂いている、とのこころです。かねて、私の罪業の深いところから、隔て心のやまぬのを全理解して下さるために、飽くまで私の隔て心のやまぬことを受けいれて、無限に隔て給わぬが永劫の御修行です。……」
……　……
信哉「本当の誠実とは、いかなる不実をもすてず、不実のものが、遂にその誠実に恐れ入り、頭を下げて、心から感謝するまで誠実をもって貫いて下さるものでしよう。
極悪の者は死刑です、これはこの世では定まっていることです。然し仏の無碍のお慈悲は、死刑囚なればこそ、それをあわれみ、決してお呆れないのです。この世では悪事をすれば罪になります。それは、そうしなければ世の中の平和秩序が保てぬから、人間の世の中では仕方がないのです。この世で罪に服して処刑されても、それを何処までも捨てぬという深いお心を聞けば、何時、何処で死んでも、そのお慈悲の深いみ心に自然に飛んで行けるでしよう。何の躊躇も遠慮もなく、真直ぐにそこへ行けるでしよう。迎えを待つまでもなく、一人で行けるでしよう。」
お小夜は眼をすえて信哉を見つめた。信哉もまた正しくお小夜を見護った。
小夜「ありがとう御座います……」
とていねいに御辞儀した。
（続く）

乞食

ツルゲネーフ

街を歩いていると老いぼれの乞食が行手に立った。ただれた眼にはやにが流れ、唇には色もない。それにぼろ〳〵の粗衣、膿み崩れた皮膚、……。
貧困は何とこの不幸な男を蝕んだことぞ。
差し延べる手は赤くふくれ上ってきたならしい……。
うめきながら彼はたすけをもとめる。
私は急いでポケットを残らず手探った。だが財布も、時計も、ハンカチさえもない、何も持って出なかったのだ。
乞食は待っている。差しのべた手は力無く震える。私は途方にくれてそのブル〳〵と震える穢い手を固く握った、
「悪く思わないでおくれ、本当に私は何も持っていないのだ……」
乞食はただれた眼に私を見上げ、色の失せた唇でかすかに笑った。そして私の冷えきった指を握り返す
「気におかけなさいますな旦那！もう結構で御座いますこれも有難いおほどこしですから」と彼はつぶやく。
私もまた彼から施物を得たとさとった。
（一八七八年二月）

法蔵菩薩の四十八願（四）

花田正夫

四十一願から四十八願の終りまで（但し四十六願を除いて）は、他方国土の菩薩のための御誓願であります。その菩薩方は、それ〳〵の聖なる道を修めて成仏しようと願われる求道者でありますが、そうした方々も弥陀仏の御名を聞いてそれ〳〵の利益を蒙るのであります。

さて四十願までは、一切衆生、ことに煩悩具足の凡夫のために誓われましたが、これからは聖人、賢者のための悲願であります。ここに弥陀仏の本願は凡夫をさきとされ、聖者をかねておられることが知らされますと共に、弥陀仏の御心の中には凡夫も聖人も一切がおさめられていることが仰がれます。

四十一、設い我れ、仏を得たらんに、他方国土の諸の菩薩衆、我が名字を聞かば、仏を得るに至るまで、諸根闕陋（身体がかたわで見にくいこと）して具足せずば、正覚を取らじ。

具足諸根の願であります。弥陀仏の名号を聞いた聖賢の人達は、眼や耳や鼻など六根が完全に具っているものにしたいという願であります。

孔子聖人の言葉に「善に移らず、悪を改め得ない」ことを悲しまれたものがあります。又、ゲエテのファーストに「すべて善良な人はよくなりたいという願い、それは無力ではあるが不滅の願いを持っている」とあります。そこに心の翼はあっても身の翼のそわないことを悲しんでおります。あらゆる病者を救う医学も、その限界に達する時、油がきれてどうすることも出来なくなり、万腔の涙を呑む外はありません。そこに科学に精進される方々にも深淵があります。

以上の道にいそしむ方々が如何に聖人賢者とは申せ、人間である限り矢張り万全ではありません、そうした人々も、名号のいわれを聞くとき心の眼がひらき、しびれた足が動きはじめるのであります。

私のお世話になりました某医学者が、七十過ぎられての或日「自分は四十年来キリスト教を信じてきたが、そして七旬もすぎたけれど、本当の祈りが一遍も出来ない」と悲しんで居られましたが、歎異鈔をお読みになりますと「この祈る力もないものにお念仏はおりて来て下さる、祈り得ないものをことにあわれんで下さる、有り難いことです」と非常に喜ばれました。その後も形はキリスト教徒で居られましたが、心のしこりはそこに氷解されました。こうしたことも、この願の力であります。

四十二、設い我れ、仏を得たらんに、他方国土の諸の菩薩衆、我が名字を聞きて皆悉く、清浄解脱三昧を逮得（得きわめること）せん。この三昧に住して、一たび意を発さん頃に、無量不可思議の諸仏世尊を供養したてまつりて、しかも定意を失わじ、若ししからずんば正覚を取らじ。

これは住定供仏の願と呼ばれます。阿弥陀仏の名号を聞いた聖賢の人達は、身も心も清浄になり、僅かの間に無数の諸仏を供養出来るようにしたいとのお誓いであります。

浄土の大菩薩は、浄土にじっと坐られたまんま、自然に十方のあらゆる国々へ応化身を現して、あらゆる人々を開導せられると聞きます。私共は静に居ると動を失い、動に出ると静を失ってしまいます。

明治の初年に、シカゴで世界宗教者大会があった時、釈宗演禅師が山岡鉄舟居士をたずねて、旅費の喜捨を乞うた時「シカゴへ行くのもよいが、ここで坐っていてシカゴの様子が見えませぬか」と痛棒を加えたと聞きます。禅剣一致の極処を獲て浅利名人から一刀流の秘伝をうけ、ほどなく、無刀流を開いた鉄舟居士の心境にも、定に住しているまんま十方に応現するとあるこの願の片鱗をうかがうことが出来ます。

聖徳太子が同時に十人の訴えを聴きとられ、豊総耳皇子と世間から称えられたのも、南無仏と篤く帰依された徳光の自ずからの力によると思います。

四十三、設い我れ、仏を得たらんに他方国土の諸の菩薩衆、我が名字を聞きて、寿終りての後、尊貴の家に生れん。若ししからずんば正覚を取らじ。

生尊貴家の願であります。阿弥陀仏の名号を聞くことの出来た者は、未来に尊貴の家に生れしめたいとの願であります。

さてこの尊貴の家とは、貴賤を超越した世界のことでありましょう。聖徳太子が大国、随に小野妹子を国使として

派遣し、国交を開かれた時「東天子、西天子に書を呈す」と国書に述べられて、随の皇帝を驚かされました。この太子の心中に、大国とか小国とかのひっかかりのない、威風堂々、白雲悠々として去来するの趣が見られます。

仏弟子尼提は最下属の種族に生れ、肥汲みを仕事として居りましたが、仏のお導きをうけて、卑屈の垢が洗除されて、王候も長者も自然に頭の下がる尼提尊者と転じております。又法文の一句も暗誦出来なかった周利槃得の愚心も、仏の善導を蒙って、莞爾として光明界裡に逍遙しております。貴賤をこえ、智愚をこえる、そこにまで導きたいとの悲願であります。

敗戦の直後、米国の教育視察団が日本に訪れた時、時の文部大臣、阿倍能成氏が挨拶されました。

「……現在の日本は敗戦による卑屈の底におちています。この現状をもって本来の日本の姿と見られないように。敗戦国民が卑屈の泥を洗いおとす難しさは、戦勝国民がその慢心を砕くと同じ困難さがあります云々」

と。阿倍氏の心中に、勝ち負けを越えた尊いものがうかがえて、私は非常に嬉しかったのでありますが、こうした力を与えたいとの願であります。

四十四、設い我れ、仏を得たらんに、他方の国土の諸の菩薩衆、我が名字を聞きて、歓喜踊躍して、菩薩の行を修め、徳本（諸の功徳の本）を具足せん。若ししからずんば、正覚を取らじ。

具足徳本の願であります。諸の聖人、賢者が阿弥陀仏の名号をきいて、心に歓びが満ちて、菩薩の行、布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧の行を修して、功徳や善根を立派に得られるようにしたいとのお誓いであります。

念仏の中に絶対の大善大功徳がみちていて、相手を完全に生かすことによって、念仏の徳もいよ〳〵輝き、共に生きるよろこびを恵まれるのであります。これ相対的、最高善では、自分を立てるために相手を排するのが常であります。そこには真の調和はあり得ません。対立抗争か、妥協的平和の不安定がはてしなく続くばかりで、大満足の中に各々がその所を得しめられて天分を発揮出来る根源は、この願にはじまるとも申せましょう。

四十五、設い我れ、仏を得たらんに、他方国土の諸の菩薩衆、我が名字を聞いて、皆悉く普等三昧（無量の諸仏を一緒にあまねく見ることが出来る三昧）を逮得せん。この三昧に住して成仏にいたるまで、常に不可思議の一切諸仏を見たてまつらん。若ししからずんば正覚を取らじ。

住定見仏の願であります。弥陀の名号を聞く聖者達は、無数の諸仏方を同時に拝むことが出来るようにしたいという願であります。

普等三昧とは、あまねく平等に見てかたよらないさとりであります。私共は事毎にかたより、法を聞けば法に執着し、人に導かれると人に執して、自由も平等も見失ってしまいます。そして知らぬ間に我が宗尊しの宗我の奴隷と堕して行きます。

或は種々な教に接すると、あれもよい、これもよいとなって自分を見失い、宗教浪人となり易いのでありますが、この三昧の力で、心がしっかりと定まっていて、しかもあらゆる教を正しく理解して、それを学んで行くというようにさせたいとの願であります。

四十六、設い我れ、仏を得たらんに、国の中の菩薩、その志願に随いて、聞かんと欲わんところの法、自然に聞くことを得ん。若ししからずんば正覚を取らじ。

この願は随意聞法の願と呼ばれます。この願は国中の菩薩とありますように、浄土の菩薩、即ち弥陀の本願を信じ浄土を願う者の上に誓われたのであります。

この願がここにポツリとありますことについて、金子先生は、見仏・聞法の順によるものだろうとのことであります。この国に生れた者は、自分の願い通りにどんな教も自然に聞くことが出来るようにしたいとの願であります。

私共は誠に狭い心をしておりまして、一つの教に入ると他の教は無用となって聞く耳を失い勝ちでありますが、そのような心を開いて、見るもの、聞くもののあらゆるものの上に妙音を感知出来るようにしたいとの思召しであります。

華厳経に善財童子物語がありますが、文殊菩薩の智慧の光に護られながら、あらゆるものの上に善知識としての教を感得して行きます。社会人のすべて、宇宙の事象、家庭の親や妻、そうしたものを尊き知識として成仏するのでありますが、念仏の光を頂いて、人生の旅を続けます時、そこに無数の教をうけることは事実であります。又ともすれば独善の部屋に閉じ勝の身も、念仏に心開かれて、虚心に諸教を読み聞く時、いよ〳〵我が道が明らかになり、夫々の教の底も知れる趣きがあります。

念仏の明け暮れの生活をした良寛和尚の目には、月も、花も、紅葉も、それ〴〵の妙光を放っていることが知らされます。篤信の人々は身辺の種々の事象の上に、浄土の光の照りかえしを随喜して、そこに法喜を得ていられますの

も、この願の力によるのであります。

四十七、設い我れ、仏を得たらんに、他方の国土の諸の菩薩衆、我が名字を聞きて即ち不退転（転じ退くことのない位）に至ることを得ずんば、正覚を取らじ。

聞名不退の願であります。聖賢の道にいそしむ者も、阿弥陀仏の名号を聞いて、その徳光にふれた者は、直ちに、仏道において決して退転することのないようにしたい、との誓いであります。

聖者の道は険しい、その中途でほとんどの人は力尽きて落伍するものであります。然し一度も名号を聞いた人は、そこに救いの手を見出して成仏せしめられるのであります。その例として私は解脱上人を思い浮べます。上人はきびしい修行に精進されて、法然聖人の浄土宗の教に反対されましたけれど、いよ〳〵晩年、死を前にされて、微小の善業さえも名利のために妨げられて、心の中に真如の明月を観ずるなどとはとても出来ない、自分は最下の凡夫であったと慚愧されて念仏往生を願われたのであります。不退転をお誓い下さるのは、聖道の賢人も、退転の陥井のあるを見抜かれての大悲の願であります。登って来い救うでなくして、落ちるものを掴んで捨てたまわぬまことがこの願であります。

四十八、設い我れ、仏を得たらんに、他方国土の諸の菩薩衆、我が名字を聞きて、即ち第一、第二、第三法忍（音響忍これは仏の音声で真実をさとり、柔順忍これはすなおに教にしたがうさとり、無生法忍これは不生不滅の真理を認めて心が動揺せぬこと）に至るを得るを得ず、諸仏の法において即ち不退転を得ること能わずんば、正覚を取らじ。

得三法忍の願と呼ばれます。

第一法忍は音響忍と云われ、菩薩の初地から第三地の時に得られるさとりであります。仏の音声を聞いてさとるのであります。

第二法忍は柔順忍で、菩薩の第四地から第六地の時に得られるさとりであります。水の方円の器にしたがうようにあらゆる教をうけいれて、それを身につけるという広大なさとりであります。

第三法忍とは無生法忍と呼ばれます。菩薩の第七地から第九地、もう一歩で仏のさとりという位の時に得られるさとりであります。我々凡夫は煩悩に幻惑されて真実でない虚妄の世界を実在と思い込んで幻滅又幻滅をくりかえして

おりますが、このさとりに到達すると、その妄を破って真実の世界に悟入するのであります。

以上のさとりの境界は、私共の心も言葉も及ばないところでありますが、聖道の賢者達はそれを願って精進していられるのであります。ことに諸仏の法において不退転の位を得ることは菩薩方の最高無上の志願でありましょう。

さてここに竜樹大士の教を思い浮べます。大士は菩薩が不退の位を求める道は実に険しくて、種々の困難があってとても至難であるが、船に乗ればどんな重い石でも彼岸に到達出来るように、弥陀仏の本願に乗托すればすみやかに不退の位を得ることが出来ると勧めます。

不退のくらいすみやかに　得んと思わん人はみな
恭敬の心に執持して　称名念仏はげむべし

と聖人はその教を讃仰していられます。御自らは初地の菩薩のさとりをひらかれながら、名号の徳海に帰入して、凡夫や聖者のへだてなく、念仏をお勧め下さる竜樹大士の上に、この願の深意を拝することが出来ます。

以上四十八願を聞信しながら、気付かされるまゝを述べましたが、針の孔から天のぞくの感がしきりであります。

しかし全体を通して身に感じますことは、「法蔵菩薩は今一人の私になりきって下さる方である」という一事であります。「今一人の私」とは、かつてヘレンケラー女史から聞きとった言葉であります。それは或日の講話に、

「盲で聾で、したがって唖の私には外からの教師は不要である。三重苦の私になくっちゃならぬのは、今一人の私である。今一人の私とは、生涯かけて私の目になり、耳になり、口になって下さる人である。それは私の先生アンナサリバン女史である」

と。私はこの一句が心に深く刻みこまれました。そして何かの縁にふれると思い出されます。今回も四十八願を一願々々と拝読申しながら、矢張りうなずかされるのがこの一句であります。

源信僧都は「末代濁世の目足なり」と本願念仏を渇仰していられます。智目、行足を欠く私の目となり足となって下さることを喜ばれたのであります。

親鸞聖人は、唯信鈔の思召しをうけられて

無明長夜の灯炬なり　智眼くらしと悲しむな
生死大海の船筏なり　罪障重しと歎かざれ

と讃仰していられます。

最後に、かくまで「今一人の私」になりきっての御苦労をお続け下さる阿弥陀仏を、よそなる教師、よそなる仏とへだて、疑うことのいかに痛ましいことかを、かつわび、かつ謝しまつりながら稿を終ります。

あとがき

五月三十一日の朝日の夕刊に、まぶたの父と二十一年ぶり対面という題で高橋明広君の記事が写真入りで報道されました。昭和十五年に満州のチヤムスに生れ、終戦の直前に父の鶴治さんが現地応召したため、一家は難民として新京などをさまようち明広君は家族とはぐれ、気がついたときは、一人で見知らぬ収容所の中にいた。わかるのは自分が日本人であるということだけだった由であります。

三十一年八月、最後の集団引揚げで舞鶴についたが、言葉もわからず身寄りもない、自分の名さえ知らない明広君はぼう然とするばかり。一緒の引揚者に佐伯さん一家がいて戸籍に入れて貰ったが、まぶたの父が忘れられず、「ツルウジ」という名前と、チヤムスで刀剣をあつかい剣道が強かつたという記憶だけをたよりに、十年間、色々の仕事をしながら廿府県を探し廻つた末、やつと厚生省の世話で対面出来たという、涙ぐましい記事でありました。

ところが、同朋会館の木村無相さんはその直前京都で明広君の訪問をうけ一夜同宿した時、「子の母を思うが如くにて衆生仏を憶すれば現前到来遠からず如来を拝見うたがわず」とある和讃を同君に示すと、明広君曰く「僕は幼い時に可愛がつてくれた親が忘れられないので尋ねているのです、子として親を探しているのではありません」と即座に答えたので、ビツクリされたそうです。

左様、恋しやと思う心は我ならで、親のまことの通い来るなり、で「本願力自然のひくところ」を強く教えられました。

○　○

近角先生の「善巧摂化」の御講話は、実業家の福間さんが癌になられて一家あげて、番頭さんまでも念仏の信に入られたいちじるしい体験の記録であります。最近癌疾で苦しまれる方々が身辺に読者の方々に多いにつけまして記載させて頂きました。

柳瀬様の原橋は、短歌草原誌の巻題言であります。深い信の上からおのずと生れます作歌のこころ、信が作歌のいのちと輝いていることを知らされますことです。

西元様の「父母の国」は広島市での講話の要旨で中外日報に出ていましたものを、特にお願いしますと、こまやかに修正して下さつたものであります。

〈聚墨記〉

御案内

※毎月第一、二、三日曜午后一時半、一道会例会。
市電、新郊通り一丁目下車、東入ル。三筋目、左入ル。

※毎月二十四日、午前午后、教西寺、法話会。
市電、御器所通り下車、昭和区小桜町。

慈光第十八巻　第七号　昭和四十一年七月十五発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

定価　半年　二百円（送共）
一年　四百円（送共）
名古屋市南区駈上町二ノ八八
編集・発行人　花田正夫
電話　八二一局　七〇三七番
愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人　本田政雄
名古屋市南区駈上町二ノ八八
発行所　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番